

異世界の峡谷の吊り橋
で関所番として転生し
た元陶芸家の Ω カント
が山賊の頭領 α に「通
行料は金じゃねえ、お
前の身体だ」と崖の洞
穴で番にされる話

「——見つけた」

低い声が鼓膜を貫く。五年ぶりの α の匂い。焦げた樹脂と獣脂が混ざった、重く甘い匂いが鼻腔の奥を焼いて、下腹にじわりと火が灯る。

逃げろ。

足が、動かない。

琥珀色の瞳が松明の炎を映して揺れている。

五年前の嵐の夜と同じ眼だ。

——違う。あの時より、もっと冷たい。

「ひ……っ」

声が漏れたのは、ガルドの指が首筋に触れたからだ。五年前に歯を立てかけた、あの場所。項腺の上を親指でなぞられただけで、カントの奥がきゅう、と締まった。

(嘘……っ♡ 抑制剤、まだ効いてるはずなのに……っ♡♡)

効いていない。この男の前では、最初から効いていなかった。

「通行料の話をしようぜ、関所番」

ガルドの手が腰を引き寄せる。吊り橋の端まで追い詰められ、背に冷たい欄干が当たった。五年前と同じだ。あの夜も橋の上だった。あの夜は——飛び降りた。

視線が峡谷の闇に吸い込まれる。

「今度は橋から飛んでも無駄だ。下で待ってる奴がいる」

退路が断たれる。氷点下の風がユヅキの頬を切り、同時にガルドの体温が腰に沁みた。

「通行料は金じゃねえ」

耳朶に唇が触れるほどの距離。吐息がかかる。

「お前の身体だ」

カントから蜜が滲んだ。たった一言で。抑制剤を飲んでいるのに、 α の声だけで身体が蕩ける。

(やだ……っ♡♡ 濡れてる……っ♡♡ こんな、声だけで……っ♡♡)

松明を持ったガルドの部下たちが、橋の両端を塞いでいる。逃げ場がない。歯を食いしばり、かろうじて声を絞り出した。

「……放せ。私は、この関所の番人だ」

「五年前に死んだはずの番人が、偽名で別の関所に潜り込んでたのか。律儀なこった」

ガルドの口元が歪む。笑ってはいない。琥珀の瞳の奥で金色の光がちらりと瞬いた。 α 覚醒の兆し。

「行くぞ。お前の関所は今日で閉鎖だ」

腰を掴まれたまま引きずられる。吊り橋が軋んだ。足が震えていた。寒さだけじゃない。カントの奥で、 α のフェロモンに火をつけられた疼きが、一步ごとに膨れ上がっていく。

太腿の内側を蜜が伝い落ちるのを、必死で堪えた。

◇ ◇ ◇

洞穴の奥。ガルドの私室。

焚き火がひとつ。岩壁は凍りつくほど冷たく、火の届かない場所は吐く息が白い。

部下たちが出ていった。「夜明けまでに峡谷を通過しないと国境が閉まります」と言い残して。ガルドだけが残った。

焚き火を挟んで、二人。

沈黙。

炎が爆ぜる音だけが洞穴に反響する。焚き火の反対側で膝を抱え、ガルドから少しでも距離を取ろうとしていた。だが閉じた空間に α のフェロモンが充満していく。逃げ場がない。

「五年だぞ」

ガルドの声のトーンが変わった。粗野な響きが消えて、低く、静かで、重い。

「……」

「お前が橋から落ちた後、下流を三日探した。死体も見つからなかった」

焚き火の炎がガルドの横顔を照らす。顎の古い刀傷。五年前にはなかった皺が目尻に刻まれている。

「死んでたら匂いで分かる。でも何もなかった。ってことは生きてる。——それだけを頼りに、五年間、峡谷中の関所に目を光らせてた」

(……五年間)

胸が軋んだ。

あの夜のことを思い出す。転生して三年目。峡谷の関所番としてようやく生活が安定した頃だった。嵐の夜、吊り橋の補修をしていた。雨でずぶ濡れになった身体から、抑制剤で押さえ込んでいた Ω のフェロモンが漏れた。

そこに山賊団が通りかかった。

先頭にいた男——ガルドが、足を止めた。鼻腔を広げ、嵐の中で匂いを嗅ぎ取った。琥珀の瞳が金色に変わった。

「お前…… Ω か」

橋の上で組み伏せられた。首筋に歯が当たった。番の痕を刻まれる寸前。

恐怖で震えながら——身体が、応えてしまった。

(あの夜……カントが、勝手に……っ♡♡)

生まれて初めてだった。自分の意志とは無関係に、身体が「この男に番にされたい」と叫んだ。カントの奥から蜜が溢れ、腰が勝手にガルドの方へ傾いた。

その恐怖。

前世は陶芸家だった。自分の手で土を捏ね、形を作ることに誇りがあった。なのにこの世界では——本能に形を決められる。 α の匂いひとつで身体が従う。自分が自分でなくなる。

だから飛んだ。欄干を蹴って、峡谷の激流に。

落ちていく一瞬、ガルドの手が空を掴むのが見えた。

あの顔を、五年間忘れられなかった。

「お前の匂いを忘れたことはねえ」

ガルドの声が焚き火の向こうから届く。

「五年間、他の誰からも同じ匂いはしなかった」

沈黙。焚き火の薪が崩れ、火の粉が宙に散った。

「——あの夜。嵐の中で。お前が飛び降りた時」

言葉が途切れた。

「——俺が怖かったか」

答えられない。焚き火の向こうのガルドの顔が歪んで見えるのは、炎の揺らぎのせいだ。涙のせいじゃない。

「……怖かった」

「だろうな」

「でも——」

言いかけて、止まった。

(——あの夜、本当に怖かったのは、ガルドじゃない)

(自分の身体が、あの人を求めたこと)

(Ωとして「形を決められる」ことを、受け入れそうになった自分が——怖かった)

焚き火が爆ぜる。ガルドは続きを催促しない。琥珀の瞳がこちらを見ている。五年前のように金色には光っていない。抑えている。

時間が経った。外気温がさらに下がる。身体が震え始めた。
歯がカチカチと鳴る。

そして——抑制剤の効果が、ついに切れた。

じわ、と。太腿の内側に熱が走る。カントの奥から蜜が滲み出す。閉じた洞穴に Ω のフェロモンが広がっていく。

「効き目が切れてきたな——抑制剤」

ガルドの声。静かだが、その奥に押し殺した熱がある。

焚き火から離れようとした。壁際へ。凍えても、あの男から離れなければ。

壁に背中をつけた。氷のように冷たい岩肌。歯の根が合わない。全身が震える。

なのにカントだけが熱い。じくじくと疼いて、 α のフェロモンに應えるように蜜を溢れさせる。

(やだ……っ♡♡ 身体が……勝手に……っ♡♡ 五年前と、同じ……っ♡♡)

「凍え死にたいなら止めねえよ」

ガルドは動かない。焚き火の傍から。

「でもそれはお前が選んだ死に方か？」

沈黙。

「五年前は橋から飛んだ。今度は凍死か。——俺から逃げるために死ぬのが、そんなに御望みか」

胸を挟られた。

逃げ続けてきた。五年間ずっと。偽名を使い、抑制剤を飲み続け、誰にも触れさせず。

このまま逃げて、どこへ行く。

また別の関所で、別の名前で、いつまで。

凍える手足。カントの疼き。二つの苦痛に挟まれて、視界が霞んだ。

ガルドが立ち上がる音がした。足音が近づく——かと思ったら、止まった。

温かいものが肩にかけられた。ガルドの外套。αの体温とフェロモンが染みついた、分厚い毛皮の外套。

「……っ♡♡」

身体が跳ねた。外套に残るガルドの匂いが肌に沁みて、カントが一気にとろりと蕩けた。太腿を蜜が伝い落ちる。

(だめ……っ♡♡ この匂い嗅いだら、もう……っ♡♡)

ガルドは焚き火の傍に戻り、背を向けた。

「俺はここにいる。来なけりや来い。来なけりや——夜明けまで好きにしろ」

五年前とは違う。あの夜は力ずくで組み伏せた男が、今は——待っている。

その変化が、内側の何かを揺さぶった。

外套を握りしめる。振り払えない。 α の匂いが濃くて、身体が痺れるように熱くなっていく。凍えていた手指が、外套の毛皮の中でじわりと温まる。

陶芸家の手だった。前世では。自分の手で形を作ることしか知らなかった手。

今、その手が——ガルドの匂いに縋っている。

(……もう)

(もう、疲れた)

(逃げるのに)

足が動いた。壁を離れた。焚き火に向かって。一步。また一步。

ガルドの背中が見える。大きい。五年前より、さらに。

その隣に、座った。

「……寒い」

たった一言。

それが五年間で初めて、自分からガルドに歩み寄った瞬間だった。

ガルドが振り向く。何も言わない。腕を開く。

その腕の中に——入った。

ガルドの体温が全身を包む。焚き火の熱とは違う、生きている熱。 α の熱。骨の芯まで沁みて、凍えた身体を内側から溶かしていく。

「——冷てえな」

ガルドがユヅキの手を取った。大きな手で包み込む。五年前、橋の上で空を掴んだ手。

涙が溢れた。泣くつもりなんかなかったのに。

「……五年間」

声が震える。

「五年間、ずっと……怖かった。お前がじゃない。自分が……自分の身体が、お前を求めたことが……」

言ってしまった。五年間、誰にも言えなかったことを。

ガルドの指がユヅキの頬に触れた。涙を拭う。太い指が不器用に。

「もう逃げなくていい」

五年前は——「逃がさねえ」だった。

今は——「逃げなくていい」。

五年かけて積み上げた壁が、音を立てて崩れた。

◇ ◇ ◇

ガルドの唇が首筋に落ちた。五年前に噛みかけた場所。今度は——噛まない。唇で触れるだけ。

「あ……っ♡」

カントから蜜が溢れた。堰を切ったように。抑制剤が完全に切れた Ω の身体が、 α の接触に暴走する。

「ん、あ……っ♡♡ だめ……首、だめ……っ♡♡ そこ触れたら……っ♡♡」

「項腺がびくびく脈打ってる。——五年間、ここをこうされたかったんだろ」

「ちが……っ♡♡ あ……っ♡♡」

違わない。首筋に唇を押し当てられただけで、カントが痙攣するほど蜜を吐き出している。太腿がぐっしょり濡れて、焚き火の熱でじわりと湯気が立った。

ガルドの手が腰に回る。衣服の上から背中、腰、太腿をさする。冷え切った身体を温めるように。

「全身冷え切ってやがる。こんなんで五年も——馬鹿が」

「う、るさ……ひっ♡♡」

手が内腿に滑り込んだ。衣服越しにカントの膨らみに触れられ、腰が跳ねる。

「ここが一番熱いじゃねえか。凍えてるくせに、ここだけは——」

ズボンを下ろされた。冷たい空気がカントの肌を刺す。ひやり、と。

——直後、ガルドの指がそこに触れた。

「び……っ♡♡ あつ……っ♡♡ 指、あつい……っ♡♡」